

心臓血管外科の手術では、さまざまな糸が使われています。冠動脈や大動脈など、動脈の吻合では、専用の吸収されない糸を用います。

これに対して、皮膚や皮下組織では吸収される糸を使用します。約2ヶ月で糸としての張力を失い、半年程度で吸収されます。



## 心臓血管外科★健康講座

心臓血管外科で行われる皮膚縫合は、原則として吸収糸で行っています。糸によって多少の差はありますが、いずれ体内で溶けて吸収されますので抜糸は不要です。



当科で胸部、腹部のキズの最表層を縫合する際に使用する「4-0 PDS II」という吸収糸のパッケージ写真です。

「4-0」というのは、糸の太さを示す数字で、最初の数字が小さいほど太い糸（1-0の方が3-0より太い）です。4-0は髪の毛より少し太いくらいの糸です。

岩手県立中央病院心臓血管外科では身近な医療情報を解説した健康講座を県民の皆さんに提供します。第26号は「手術創の縫合」です。

かつては、外科手術後には必ず「抜糸」がありました。絹糸やナイロン糸で皮膚を縫合し、術後約1週間をめどに抜糸していました。90年代あたりまでは心臓血管外科でもそうでした。

現在では、皮膚、皮下組織の縫合は吸収糸で行なっています。手術を受けた患者さんは、まじまじとご自分のキズを見るのが少ないからでしょう。今でも「抜糸はまだですか」と質問



当科で頸部、鎖骨下、そけい部、大腿部など胸部、腹部以外のキズの最表層を縫合する際に使用する「4-0 V-Loc」という吸収糸のパッケージ写真です。

このように、さまざまな種類の糸があり、その中から、性能、費用対効果、使い勝手などを吟味して、最も良いと思われる糸を選別して使用しています。

を受けることがあります。術後のキズを見ていただければ、初めから皮膚の表面に縫った糸がないことに気づかれることでしょう。

キズ自体の縫合は埋没されていますので、抜糸は不要ですが、心臓血管外科の術後に抜糸が必要なこともあります。「ドレーン」や「体外式ペースティングワイヤー」の固定の糸や縫合した糸は皮膚の表面にありますので、**抜糸が必要**です。術後2週間前後をめぐりに行なっています。長くおいたドレーン抜去からはその1週間後に抜糸しています。

手術を受けた方にとっては、手術のキズというのは手術そのものといってもいいくらい重要なものです。当科では、できる限りきれいに治るように注意して縫合しています。

また、退院後、まれにキズから糸が出てくることもあります。体内に埋没されている部分はいずれ吸収されることから、自然に脱落しますが、気になる場合は外来で抜糸しています。

キズは気になるものですが、**手指などでいじると高率に感染**します。手指は一見きれいでも**雑菌だらけ**なのです。また、大事にしすぎて**不潔になっても感染**します。ボディソープなどでキズを軽く撫でる感じで洗い、シャワーで流し、**清潔を保ちましょう**。

岩手県立中央病院心臓血管外科

健康講座 第26号